「紡ぐプロジェクト」の一環として開催した展覧会
これまで、いま、そしてこれから ──

2019
年度

特別展「御即位30年記念─両陛下と文化交流」
19年3月〜4月　東京国立博物館 本館特別5室・特別4室

特別展「美を紡ぐ日本美術の名品─雪舟、永徳から光琳、北斎まで」
19年5月〜6月　東京国立博物館 本館特別5室・特別4室ほか

2020
年度

特別展「工藝2020─自然と美のかたち─」
20年9月〜11月　東京国立博物館 表慶館

特別展「桃山─天下人の100年」
20年10月〜11月 東京国立博物館 平成館

「日本のたてもの─自然素材を活かす伝統の技と知恵」
20年12月〜21年2月　東京国立博物館 表慶館
20年12月〜21年1月　国立科学博物館 日本館1階 企画展示室
20年12月〜21年2月　国立近現代建築資料館

2021
年度

特別展「聖徳太子と法隆寺」
21年4月〜6月　奈良国立博物館
21年7月〜9月　東京国立博物館 平成館

特別展「国宝　聖林寺十一面観音─三輪山（みわやま）信仰のみほとけ」
21年6月〜9月　東京国立博物館 本館特別5室
22年2月〜3月　奈良国立博物館

特別展「京の国宝─守り伝える日本のたから─」
21年7月〜9月　京都国立博物館 平成知新館

特別展「最澄と天台宗のすべて」
21年10月〜11月 東京国立博物館 平成館
22年2月〜3月　九州国立博物館
22年4月〜5月　京都国立博物館 平成知新館

ユネスコ無形文化遺産
特別展「体感！日本の伝統芸能─歌舞伎・文楽・能楽・雅楽・組踊の世界─」
22年1月〜3月　東京国立博物館 表慶館

2022
年度

沖縄復帰50年記念　特別展「琉球」
22年5月〜6月　東京国立博物館 平成館
22年7月〜9月　九州国立博物館

特別展「日本美術をひも解く─皇室、美の玉手箱」
22年8月〜9月　東京藝術大学大学美術館

特別展「京に生きる文化　茶の湯」
22年10月〜12月　京都国立博物館 平成知新館

2023
年度
※●は関連の企画

特別展「東福寺」
23年3月〜5月　東京国立博物館 平成館

「国宝　普賢菩薩像　完成披露展示」●
23年4月〜5月　東京国立博物館 本館国宝室

国宝
普賢菩薩像
展示
4月11日
5月7日

「横尾忠則　寒山百得」展
23年9月〜12月　東京国立博物館 表慶館

特集「東京国立博物館の寒山拾得図」
23年9月〜11月　東京国立博物館 本館特別1室

2024
年度
（予定）

特別展「法然と極楽浄土」
24年4月〜6月　東京国立博物館 平成館
24年10月〜12月　京都国立博物館 平成知新館
25年10月〜11月　九州国立博物館

特別展
法然と
極楽浄土

and more　**これからも未来にむけて紡ぎます！**

特別協賛 ｜ キヤノン、大和証券グループ、三井不動産、三菱地所、明治ホールディングス
協　　賛 ｜ JR東日本、清水建設、竹中工務店、三井住友銀行、三菱商事

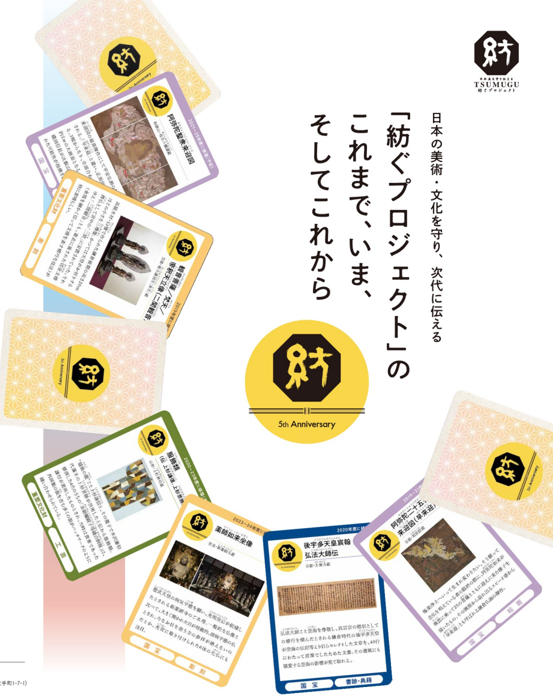
2023年11月発行
［発行元］読売新聞東京本社（東京都千代田区大手町1-7-1）

TSUMUGU
紡ぐプロジェクト

日本の美術・文化を守り、次代に伝える

「紡ぐプロジェクト」の
これまで、いま、
そしてこれから

5th Anniversary

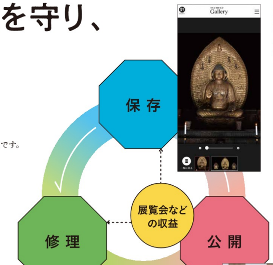

5th Anniversary
阿弥陀聖衆来迎図
観音菩薩・勢至菩薩
重要文化財
国宝
彫刻
服飾類
工芸
薬師如来坐像
後宇多天皇宸翰
弘法大師伝
国宝
書跡・典籍
阿弥陀二十五菩薩来迎図（早来迎）
国宝
絵画

日本の美術・文化を守り、次代に伝える

2023年11月で5周年をむかえる「紡ぐプロジェクト」は、
皇室ゆかりの美術工芸品や国宝・重要文化財など、
日本の美を未来へ継承し、国内外へ発信していくために、
文化庁、宮内庁、読売新聞社が連携・協力して取り組んでいる事業です。
特別協賛および協賛企業の協力を得ながら、

❶ **文化財の修理**
❷ **ポータルサイトの運営**
❸ **展覧会の開催**

を軸に、貴重な文化財を未来に引き継ぐための
「保存・修理・公開」というサイクルを維持していきます。



民間企業
などの支援

修理助成事業や、高精細デジタル画像の活用で文化財を保存します

高精細なデジタル画像で保存した文化財の歴史的価値などを、
ポータルサイトや「TSUMUGU Gallery」で解説します

「TSUMUGU Gallery」は、日本が誇る絵画や仏像などの名品を高画質の美しいデジタル画像で紹介するスペシャルコンテンツです。ユーザーの思いのままに隅々まで拡大可能な新しい鑑賞スタイルを提供しています。

TSUMUGU
Gallery
About
Japan Art & Culture

修理助成した文化財もふくめ、日本の美術・文化を紹介する展覧会を開催します

展覧会開催とあわせて、読売新聞「紡ぐプロジェクト面」の特集記事や
ポータルサイトを通じて、定期的に日本文化の魅力を発信します

2022年8月から東京藝術大学大学美術館で特別展「日本美術をひも解く─皇室、美の玉手箱」を開催しました。

ポータルサイト「Japan Art & Culture」は、「紡ぐプロジェクト」の展覧会情報や文化財修理のリポート、第一線の専門家による作品解説はもちろんのこと、伝統工芸や伝統芸能に関する記事など、多彩なコンテンツをお届けしています。

民間企業からの協賛金や展覧会の収益の一部をもとに、文化財の修理に必要な助成を行います

修理する作品は有識者らで構成する選考委員会が選定します

第1弾は、京都にある浄土宗の総本山・知恩院が所蔵する
国宝「阿弥陀二十五菩薩来迎図（あみだにじゅうごぼさつらいごうず）」などが対象でした。

TSUMUGU
「早来迎」輝き再び

（つむぐ）「紡ぐ」ってなんだろう？

※イメージ

名称について

「紡ぐ」の名前は、皇后陛下が飼育されてきた国産蚕の糸を文化財修理に使ってきたことにちなんでいます。

ロゴについて

「紡」の字は、宮田亮平・前文化庁長官による揮毫（きごう）。5周年の記念ロゴは、シンプルな結びの罫線を用いて、文化や伝統と現代の結びつきを表現しています。

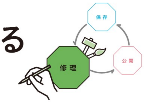
5th Anniversary

もっとくわしく知りたい！

新たな価値を生み出す

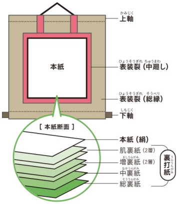
読売新聞「紡ぐプロジェクト面」は、月1回、全国版朝刊に4ページ全カラーで掲載される大型特集です。「紡ぐプロジェクト」の展覧会情報、文化財修理の進捗状況などを発信しています。また、伝統文化の継承に携わる魅力、技の奥深さなども分かりやすく伝えています。

国宝「早来迎」にみる
文化財修理の工程



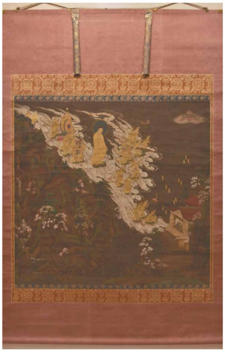
「早来迎」の呼び名で知られる国宝「阿弥陀二十五菩薩来迎図」（京都・知恩院蔵）は、
「紡ぐプロジェクト」の文化財修理事業で最初に助成対象となった作品の一つです。
2019年春から始まった作業が2022年春に完了しました。
文化を未来へ守り継ぐための３年にわたる工程をたどります。

阿弥陀如来が諸菩薩を従えて、往生を願う臨終の念仏者の元へ飛来する様子が、縦1.45メートル、横1.55メートルのほぼ正方形の大画面に描かれています。鎌倉時代の仏画の傑作として知られ、1934年以来の修理が京都国立博物館（京都市東山区）の文化財保存修理所で行われました。修理では絵の具の剥落止めや汚れのクリーニング、絵が描かれている絹のすぐ裏側の肌裏紙の取り換え、表具の仕立て直しなどが行われました。

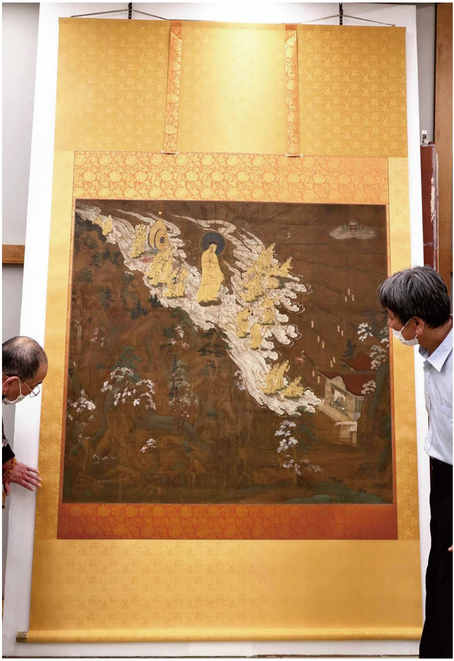


「早来迎」は2019年4月11日、寄託先の京都国立博物館収蔵庫から、修理所に運び込まれました。傷んだ箇所を特定し、どのような作業を行えばよいか検討するための写真撮影を行いました。表側の絵の具の剥落を膠水溶液で抑える「剥落止め」、本紙の周りの表具を外す「解体」、汚れを吸着・除去する「クリーニング」、表側全体を養生する「表打ち」の順で作業を進めました。その後、19年12月頃からは、本紙裏側の作業にあたりました。

BEFORE



AFTER



2019年春からの解体、クリーニングなどを経て
2019年12月頃 START!

PROCEDURE

1 旧肌裏紙の除去

旧肌裏紙は黒っぽく、表側の白い絵の具が際立つ一方、左下に描かれた山々や水の流れなどは見えづらくなっていました。

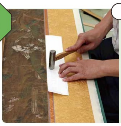
2 肌裏打ち

古い肌裏紙を取り除いた後、裏側から顕微鏡や蛍光X線などの撮影を行いました。裏側の状況を確認できるのは修理のときだけで、100年に1度の貴重な機会です。どのような絵の具が使われているか、下描きの様子などを調べたうえで、新しく用意した薄茶色の肌裏紙で本紙に2層の肌裏打ちを行いました。

3 折れ伏せ

絹や紙に描かれた絵は、経年劣化で折れや亀裂ができてしまいます。折れを抑えるため、3ミリ幅ほどの細いテープ状に切った紙を貼って、へらのような道具で抑えていきます。

4 仕立て

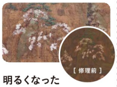


本紙の周りに取り付ける「表装裂」を新調しました。本紙と表装裂の裏側にそれぞれ厚みの異なる紙で裏打ち（増裏打ち）を施して厚みをそろえたあと、つなぎ合わせて掛け軸の形にします（付け廻し＝写真＝）。その後さらに2回の裏打ち（中裏打ち・総裏打ち）を行い、全体をしっかり支えられるようにします。

5 補彩

本紙の絹に穴が開くなどしていた場合は、新しい絹を用意し、強度が周囲に合うよう劣化させて補うのが「補絹」、色を塗る作業が「補彩」です。他の部分と色が異なると鑑賞するときに違和感があるので、よくなじませなければなりませんが、後から補った、と後世の人が分かるようにする必要もあります。慎重に色を選び、全体のバランスを確認しながら進めます。

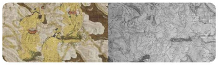
2022年春 FINISH! 修理を終えて新たな発見がありました



［ 修理前 ］

明るくなった

今回の修理で古い肌裏紙を除去して薄茶色の新しい肌裏紙に交換したことで、修理前は背景が黒っぽく沈んでいた水面の薄い青色や力強い山肌などの表現が、はっきり分かるようになりました。



新たな発見

調査のため裏面に赤外線を照射したところ絵の具の下に隠れていた下描きの墨線が明瞭になりました。下絵の段階から変更された部分が少ないとみられます。また、阿弥陀如来は表から見ると金色ですが裏側は白い彩色が施されていることもわかりました。このような表現は鎌倉時代の古い技法を残している可能性があり、制作年代は13世紀後半から14世紀初頭と推定されます。

写真はいずれも光影堂提供

保存
修理
公開

修理を終えて

2024年、特別展「法然と極楽浄土」で国宝「早来迎」を修理後初公開！

2024年の開宗850年を機に、鎌倉仏教の一大宗派である浄土宗の美術と歴史を紹介する展覧会を開催します。
国宝「阿弥陀二十五菩薩来迎図（早来迎）」や「仏涅槃像」など、浄土宗ゆかりの多彩な文化財をご覧いただけます。

※展覧会は東京・京都・福岡の各会場に巡回します。各作品の各会場での展示期間など詳細は展覧会公式サイトをご覧ください。
東京会場での「早来迎」の展示期間は、2024年4月16日（火）～5月12日（日）です。

SPECIAL EXHIBITION
HŌNEN AND PURE LAND BUDDHISM
特別展
法然と極楽浄土
2024年 4月16日(火)—6月9日(日) 東京国立博物館

展覧会公式サイト

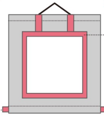
博物館でココをチェック

光影堂提供

軸首

美麗な透かし彫り

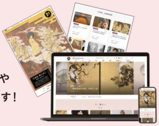
軸の先に付けられた金具「軸首」も、新たに作られました。唐草文様が美しい、透かし彫りの特注品です。



表装裂

草木染の絹糸

書画を掛け軸などに仕立てる際に用いる「金襴」と呼ばれる裂を、修理の担当者が図柄から描き起こして新調しました。



その他の文化財修理の様子も、読売新聞「紡ぐプロジェクト面」やポータルサイトでご覧いただけます！

日本美を守り伝える
TSUMUGU
紡ぐプロジェクト
5th Anniversary

紡ぐプロジェクトが守り伝える文化財

「国宝」とは

文化財保護法は、国宝を「たぐいない国民の宝」としています。
有形文化財＊のうち「重要なもの」が重要文化財（重文）、重文の中でも「世界文化の見地から特に価値の高いもの」が国宝に指定されます。

国宝・重文の総数は？（令和5年11月1日現在）

国宝…………1,137件　重要文化財……13,437件（国宝を含む）

※いずれも「美術工芸品」と「建造物」をあわせた件数。

＊有形文化財
「美術工芸品（絵画、彫刻、工芸品、書跡・典籍、古文書、考古資料に加え、学術上価値の高い歴史資料）」と歴史上・芸術上価値の高い「建造物」

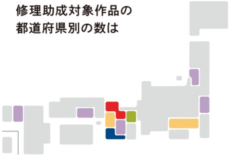
修理助成対象作品の種別数は

絵画	彫刻	古文書
13件	9件	6件
工芸	**書跡・典籍**	**歴史資料**
3件	2件	1件

カードの色について

絵画	藤色	ふじいろ
彫刻	梔子色	くちなしいろ
工芸	苔色	こけいろ
書跡・典籍	瑠璃紺色	るりこんいろ
古文書	一斤染	いっこんぞめ
歴史資料	猩々緋色	しょうじょうひいろ

修理助成対象作品の都道府県別の数は



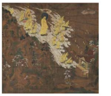
🟥 京都	17件
🟦 和歌山	5件
🟩 滋賀	3件
🟨 東京・大阪	各2件
🟪 山形・茨城・奈良・岡山・佐賀	各1件

2019～21年度に修理

5th Anniversary

阿弥陀二十五菩薩来迎図（早来迎）

京都・知恩院蔵



極楽浄土へいって生まれ変わりたい。そう願って念仏を唱えている者の臨終の際に、阿弥陀如来が飛雲に乗って25の菩薩とともに迎えに来た様子を描いたもの。その画面から溢れ出るスピード感から「早来迎」とも呼ばれる鎌倉仏画の傑作。

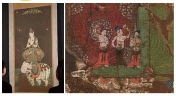
国宝　絵画

2019～21年度に修理

5th Anniversary

普賢菩薩像

東京国立博物館蔵



戦後、文化財保護法で指定された絵画の国宝第1号の一つで平安仏画屈指の名品。この時代の仏画の多くが、仏の輪郭線を朱で描いているのに対し、この普賢菩薩は墨で描かれる。それにより美白が際立っている。象の頭上に乗る小さな3体のキャラクターにも注目すべし。

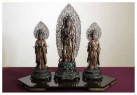
国宝　絵画

2019年度に修理

5th Anniversary

観音菩薩／梵天／帝釈天立像（二間観音）

京都・教王護国寺（東寺）蔵



高級木材・白檀で作られた鎌倉後期の高さ20cmほどの小さな三尊像。かつては天皇がお祈りする持仏として宮中の「二間」に安置されていた。それゆえ「二間観音」とも。着衣に施された切金文様（金箔を細かく切って文様を表す精巧な技法）が特に素晴らしい。

重要文化財　彫刻

2019度に修理

5th Anniversary

執金剛神立像・深沙大将立像像内納入品

和歌山・金剛峯寺蔵

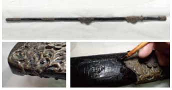
鎌倉時代を代表する仏師・快慶作の《執金剛神立像・深沙大将立像》の像内から発見された「宝篋印陀羅尼」。この納入品が見つかったことで、像が制作された時期や経緯が判明した。発見時はボロボロだったものの、修理によって文字が読める姿を取り戻した。

重要文化財　彫刻

2019～20年度に修理

直刀／黒漆平文大刀拵

茨城・鹿島神宮蔵



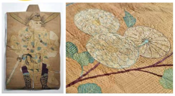
鹿島神宮の神宝の一つで、日本神話にも登場する刀剣「師霊剣」とされる。その全長は約2.7m。平安時代までに作られたと考えられ、現存する古代の直刀では最大のものとされる。黒漆平文大刀拵は、その刀を収める鞘や柄といった外装の総称である。

国　宝　｜　工　芸

2019～20年度に修理

刺繡菊鍾馗図陣羽織

東京・前田育徳会蔵



加賀前田家の初代当主・前田利家が羽織ったとされる桃山時代の陣羽織。前面には菊の花々の刺繡が、背面には魔よけの神とされる鍾馗の刺繡が大胆にデザインされている。戦場で睨みをきかせたであろうこれらの刺繡は、利家の妻・まつが施したという伝承もある。

重要文化財　｜　工　芸

2019年度に修理

正親町天皇宸翰御消息

京都・大雲院蔵

宸翰とは、天皇自筆の文書のこと。歴史的にも美術的にも価値が高い。この宸翰は、織田信長や豊臣秀吉ともかかわりが深かった正親町天皇自筆のもので、皇子や皇女の養育に関わる事柄が、文をとびとびに書く「散らし書き」で書かれている。

重要文化財　｜　古文書

2019年度に修理

道邃和尚伝道文

滋賀・延暦寺蔵

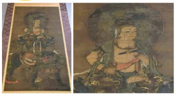
唐に留学した最澄が、中国天台宗第七祖・道邃から正統な教えを受け継いだことを証明する書の写本。“6世紀の高僧・智顗は「自分の滅後200年余り後、仏法興隆のため再び東国に生まれる」と遺言を残した。最澄こそがその再来だ”といった内容が書かれている。

重要文化財　｜　古文書

2020年度に修理

文殊菩薩像

京都・上品蓮台寺蔵



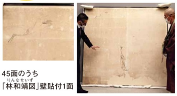
獅子に乗る文殊菩薩を描いた鎌倉時代の仏画。文殊菩薩が経巻を握りしめる姿は平安時代の仏像に見られる伝統的なスタイルであるが、面長の顔立ちや彩色には当時最先端だった中国の影響が見て取れる。新旧の要素が絶妙にミックスされた仏画である。

重要文化財　｜　絵　画

2020年度に修理

方丈障壁画
長沢芦雪筆

和歌山・成就寺蔵



45面のうち
「林和靖図」壁貼付1面

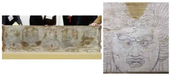
「奇想の絵師」として知られる長沢芦雪が現在の和歌山県南部に滞在した際に制作した45面の障壁画のうちの1面。画面の中央には梅を愛し、鶴を愛でていたという中国の詩人・林和靖が描かれている。左上には鶴の姿も。

重要文化財　｜　絵　画

2020～21年度に修理

板絵神像

京都・宝積寺蔵



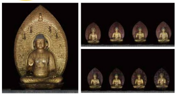
京都の宝積寺に鎌倉時代より伝わる貴重な板絵。現存する4面を修理した。疫病退散の力を持つとされた「牛頭天王」や「北野大明神」など様々な神様が描かれている。なお、安置されていたお堂は幕末の禁門の変の頃に焼け落ちたが、この板絵は被災を免れた。

重要文化財　｜　絵　画

2020～22年度に修理

阿弥陀如来坐像（九体阿弥陀）

京都・浄瑠璃寺蔵



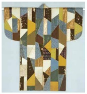
平安時代、極楽往生を願う貴族らにより9体の阿弥陀如来像を阿弥陀堂に安置することがブームとなった。しかし、その9体すべての像が当時のお堂とともに現存しているのは唯一浄瑠璃寺のみ。横一列に並ぶ9体のうち最も大きな高さ約2.2mの「中尊」はセンターに位置する。

国　宝　｜　彫　刻

2020～23年度に修理（予定）

服飾類
（伝 上杉謙信、上杉景勝所用）

山形・上杉神社蔵



“越後の龍”こと上杉謙信と、その養子で米沢藩初代藩主の上杉景勝が所用したと伝わる服飾類。修理した4点のうちの「金銀襴緞子等縫合胴服」は、謙信が着用したものとされ、当時は貴重であった外国製の裂を含む多くの裂がパッチワークのように縫い合わせられている。

重要文化財　｜　工　芸

2020～22年度に修理

泉涌寺勧縁疏

京都・泉涌寺蔵

皇室との関連が深く「御寺」とも呼ばれる京都・泉涌寺に伝わる国宝。中国に渡った経験もある鎌倉時代の僧・俊芿が、中国の様式にならった本格的な寺院を作りたいと、その創建の寄付を募る目的で作成した文書。「蝋牋」という珍しい料紙が使われている。

国　宝　｜　古文書

2020年度に修理

後宇多天皇宸翰
弘法大師伝

京都・大覚寺蔵

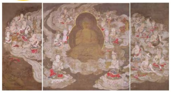
弘法大師こと空海を尊敬し、真言宗の僧侶としての修行を積んだとされる鎌倉時代の後宇多天皇が空海の伝記等より自らセレクトした文章を、40行にわたって直筆でしたためた文書。その書風にも敬愛する空海の影響が見て取れる。

国　宝　｜　書跡・典籍

2021～25年度に修理（予定）

阿弥陀聖衆来迎図

和歌山・有志八幡講蔵



来迎図の最高傑作にして平安仏画の最高傑作とされる。「早来迎」と違い、正面向きに描かれている。3幅からなり、全部合わせると幅約4m、高さ約2mの大画面となる。元は延暦寺にあったが、織田信長が比叡山を焼き打ちした際に持ち出された可能性が指摘されている。

国　宝　｜　絵　画

2021～25年度に修理（予定）

方丈障壁画
長沢芦雪筆

和歌山・成就寺蔵

45面のうち「林和靖図」襖貼付7面
「花鳥群狗図」襖貼付8面／「唐獅子図」襖貼付4面
「附指定草花・鳥図」襖貼付1面

寺に伝わる障壁画45面を順に修理している。中国の故事にちなんだ「林和靖図」とは打って変わって、「花鳥群狗図」では群がる犬たちなどが生き生きと描かれている。動物の表現も得意とした芦雪の腕が冴えわたる逸品。

重要文化財　｜　絵　画

2021～23年度に修理（予定）

蓮池図
伊藤若冲筆

大阪・西福寺蔵

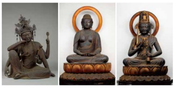
江戸時代の京都で活躍した絵師・伊藤若冲の70代の作。若冲による水墨画の代表作とされる。天明の大火によって家を失った後に描かれたためか、蓮がポツンと描かれるなど、荒涼としたはかない雰囲気が漂っている。

重要文化財　｜　絵　画

2021～23年度に修理（予定）

如意輪観音坐像／阿弥陀如来坐像／金剛薩埵坐像

京都・随心院蔵



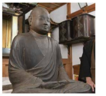
小野小町ゆかりの寺である随心院。この如意輪観音坐像は、その本尊にして秘仏。平安後期に活躍した仏師・定朝の作とも伝わる阿弥陀如来坐像と、像内に書かれた銘文から快慶の作だと判明している金剛薩埵坐像。3体とも重要文化財に指定されている。

重要文化財　｜　彫　刻

2021年度に修理

智証大師坐像

京都・若王寺蔵



滋賀・園城寺が所蔵する通称“御骨大師”は、天台寺門宗の宗祖「智証大師」こと円珍の死に際して作られた坐像で、円珍のお骨が収められたとされる。京都・若王寺の像は、これを忠実に写した模刻。表情は穏やかで、口元に笑みを浮かべているようにも見える。少し尖った頭頂部も特徴的。

重要文化財　｜　彫　刻

2021～25年度に修理（予定）

三千院 円融蔵典籍文書類

京都・三千院蔵

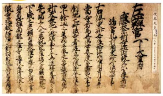
京都・大原にある三千院の経蔵「円融蔵」に伝来する膨大な文書。江戸時代の僧侶たちが仏教の教えについて研究したノートや参考書、日記といったものもあれば、歴代天皇からの書状や織田信長からの朱印状もあり、京都や門跡寺院の歩みを伝える。

重要文化財　書跡・典籍

2022～24年度に修理（予定）

東妙寺文書

佐賀・東妙寺蔵



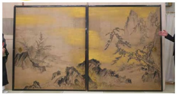
吉野ヶ里遺跡で有名な佐賀県吉野ヶ里町にある東妙寺。蒙古襲来を機に建立されたこのお寺に残る鎌倉時代から江戸時代までの全32通の古文書。それらの中には、後醍醐天皇や足利義満による文書も。九州の南北朝動乱を物語る史料として高い歴史的価値を持つ。

重要文化財　古文書

2022～25年度に修理（予定）

山水図襖 長谷川等伯筆

京都・隣華院蔵



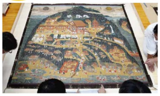
京都・妙心寺の塔頭の一つ、隣華院の客殿に飾られた襖絵。「松林図屏風」で知られる長谷川等伯60代の作と伝わる。全20面ある襖には、春夏景・夏景・秋夏景・冬景と四季折々の風景が金色の絵の具で霞をあらわした背景に墨で描かれ、四季を巡る構成となっている。

重要文化財　絵　画

2022～24年度に修理（予定）

長命寺文書

滋賀・長命寺蔵



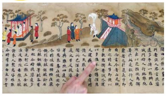
滋賀県の長命寺に伝わる全4567通の膨大な古文書群。そのうち今回修理するのは、寺の修理や経営を担当する部署にまつわる「穀屋文書」と、「長命寺参詣曼荼羅」。なお、この曼荼羅は尼僧らが全国を巡って寄付を募る際に使われたアイテムと考えられる。

重要文化財　古文書

2022～24年度に修理（予定）

絵因果経

京都・上品蓮台寺蔵



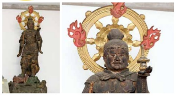
釈迦の前世の修行物語から現世で悟りを開くまでの経典を絵解きしたもの。1本の弓矢で7つの的を射抜いたり、力くらべで相撲をとったり、少年時代の釈迦の姿も描かれている。中国伝来と思われる原本を奈良時代に書き写したもので日本の絵画としては最古の部類に属する。

国　宝　絵　画

2022年度に修理

毘沙門天立像

京都・乙訓寺蔵



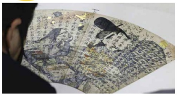
空海と最澄が初めて出会ったとされる京都の古刹・乙訓寺。その毘沙門堂に安置されている高さ約1mの毘沙門天像で平安後期作。一般的に毘沙門天像は怒りの表情を浮かべているが、乙訓寺の像は眉をひそめた憂いある表情から「幽愁の毘沙門天」との異名を持つ。

重要文化財　彫　刻

2022～26年度に修理（予定）

扇面法華経

大阪・四天王寺蔵



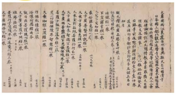
雲母や金銀の箔で美しく装飾された扇形の料紙にやまと絵を描き、その上に法華経などを写経したもの。平安時代後期の作。井戸端でお尻を洗われる子どもや、栗拾いに興じる人々など庶民や貴族の暮らしが生き生きと描かれている。が、経典の内容とは特に関係がない。

国　宝　絵　画

2023～24年度に修理（予定）

智証大師関係文書典籍

滋賀・園城寺（三井寺）蔵



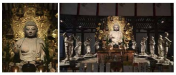
平安時代、唐に渡って密教を学んだ「智証大師」こと円珍に関する文書や経典類。自身の出自を示した家系図や、唐の役所から発給された通行許可書の原本など、世界的にも貴重な資料が含まれている。ユネスコの「世界の記憶」にも登録された。

国　宝　古文書

2023～24年度に修理（予定）

薬師如来坐像

奈良・新薬師寺蔵



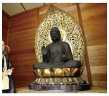
聖武天皇の病気平癒を願い、光明皇后が創建したとされる新薬師寺のご本尊。一般的な仏像と比べて、大きく開かれた目が特徴的。眼病平癒の仏とされ、今なお目を患う方の参拝が絶えないのだとか。光背に取り付けられた6体の化仏にも注目。

国　宝　彫　刻

2023年度に修理（予定）

薬師如来坐像

京都・六道珍皇寺蔵



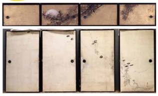
「六道さん」の名で地元の人々に親しまれ、お盆に参詣する寺として知られる六道珍皇寺のご本尊。修理前の調査で、頭から体までを一材から彫り出した一木造であることが判明。像内に赤色系の顔料が塗られていることも明らかになった。

重要文化財　彫　刻

2023～27年度に修理（予定）

障壁画 円山応挙、長沢芦雪筆

和歌山・草堂寺蔵



熊野古道のうち紀伊半島南端の「大辺路」ルートにある草堂寺に伝わる障壁画。長沢芦雪が和歌山県南部を訪れた際に描いた作品と、芦雪の師・円山応挙の作品、合わせて71面5隻からなる。中国の故事に由来するものや、自然や動物を描いたものなど、ジャンルは多岐にわたる。

重要文化財　絵　画

2023年度に修理（予定）

十一面観音立像 院範、院雲作

京都・宝積寺蔵

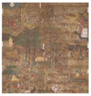
羽柴（豊臣）秀吉と明智光秀が戦った山崎の戦いの際、秀吉が本陣を置いた宝積寺のご本尊。京都を拠点に活躍した院派の仏師、院範と院雲の作とされる鎌倉時代前期の仏像。雅な曲線を描く天衣の表現は、院派の仏師ならでは。

重要文化財　彫　刻

2023～24年度に修理（予定）

仏涅槃図

岡山・遍明院蔵



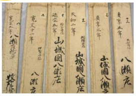
涅槃図とは、釈迦が亡くなる時の様子を描いた絵。遍明院に伝わる涅槃図は、その前後の八つの出来事も合わせて描く「八相涅槃図」と呼ばれる珍しいタイプのもの。涅槃の場面のほかに七つの情景をやまと絵のスタイルで描いており、金や赤、緑など原色が多用されている。

重要文化財　絵　画

2023～27年度に修理（予定）

八瀬童子関係資料

京都・八瀬童子会蔵



八瀬童子とは、比叡山延暦寺の麓に位置する八瀬地区に住む人々のこと。後醍醐天皇が足利尊氏の軍勢を避けて比叡山に向かった際に輿を担いだ功績により年貢などを免除されたといわれる。関係資料には、年貢の免除を記した「後醍醐天皇綸旨案」も含まれている。

重要文化財　歴史資料

＊掲載写真は、読売新聞が取材の過程で撮影した写真または提供を受けた写真を使用しています。　一部写真は、作品の部分を掲載しています。

＊掲載の修理年度は、紡ぐプロジェクトによる修理助成対象の年度です。

＊作品紹介は、独自の切り口で美術の世界をわかりやすく紹介するアートテラー・とに～さんの執筆です。